

学校教育の現場から



塚本 讓二 JOHJI TSUKAMOTO



宮崎県立飯野高等学校 校長
地歴・公民科

1983年 明治大学政治経済学部経済学科卒業
宮崎県立小林工業高校 教諭
2004年 宮崎県教育委員会 指導主事
2011年 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 教頭
2013年 県教育研修センター 課長
2015年 現職

「明治は遠くになりけり？」

宮崎県から出てきた当初、東京での生活や都会の人たちとの付き合いには、気後ればかりしていました。学業にも身が入らなくなり、何かのきっかけとして教職課程を志しますが、止める友人もいたほど、当時の私は不安定だったようです。明治は「遠く」になっていました。しかし、教職課程はリズムを与えてくれました。朝早い和泉校舎での講義、駿河台の師弟食堂で夕食をとった後の講義。学友との絆も強まりました。その一方で、のんきな体質に変化はなく、4年生当初の手続きが遅れてしまい、担当の方から「もう、教職課程をとらなくてもいいです！」と言われました。土下座して謝り、温情をいただいたおかげで、教育実習もできた次第です。明治は「近く」に寄り添ってくれました。

教職に就いて数年後、仕事に対して「猪突猛進」、常に「前へ」の体質に変化していました。「明治」は近くになっており、この4月に壮麗な校舎をもつ学校の校長に着任。以前、駿河台の校舎を取り壊し、高層ビルに生まれ変わると聞き、「明治は遠くになりけり」と感じていましたが、今では、環境は人を変え、環境を変えるのも人であることを実感しています。明大生もリベティタワーのパワーで躍動していることでしょうか。ところが、青年層の流出による人口減少の地域にある私の学校の統廃合は、いかに校舎が立



学校の中庭風景

派であっても現実問題です。それだけでなく、実は、学業や生徒指導面、地域からの信頼面で、課題を抱えていた時期もあり、それが近年、募集定員を下回る背景となっていたようです。

生徒指導困難校から 学校満足度ナンバーワンへ

昨年度、本校があるえびの市は、市の予算から給付型の奨学金や通学交通費支給、課外授業の支援等の事業を立ち上げました。目的は定員割れが続く本校の存続のためです。市が県立高校に支出するという珍しい事業です。おかげで、志願者の減少傾向にも歯止めがかかりました。しかし、全国では学校の統廃合が劇的に進んでいるように、本校と近隣の高校と

「授業」や「生徒会活動」、「他の学年との交流」が県内トップだけで誇りに思いますし、近年の校長をはじめ、教職員に努力に敬服しています。なぜなら様々な進路目標をもつ生徒たちに、徹底した個別・少人数指導を展開してきたからです。生徒と保護者の信頼も獲得、進路実績も飛躍的に向上しています。また、小・中学校との一貫教育により、多様な教育活動に取り組み、地域に貢献する意欲と態度を養ってきました。これこそ日本の教育の再生を根底で支えるものと思えます。本校には中学校までの学習や基礎的・基本的な学力が十分と言えず、自分に自信をもてない生徒もいます。しかし、学力をつけ、自立心を伸ばして、充実した学校生活を送ってもらおうとしてきたことは、先の調査結果から一目瞭

徹底した個別・少人数指導 充実した真の小中高一貫教育

の統廃合の計画には合理性があります。ちなみに、その可能性を示唆している県教育委員会が毎年、県立高校の全卒業生を対象に実施している「自分の学校の満足度に関するアンケート」の結果は、以下のとおりです。

- 授業、生徒会活動、他の学年との交流で満足度県内トップ
- ホームルーム活動、施設、学校全体の充実度でベスト5内
- 入学したこと、学科の学習と進路、教師との関係でベスト10内



小中高合同による「子どもサミット」

然です。えびの市は消滅可能性都市のひとつですが、生徒の半数は卒業後、いつかは地元に戻ってきたいと言っています。豊潤で清らかな水、おいしい米がたくさんとれ、満足度トップの高校があつて、その生徒が地元で暮らしたいという都市を消滅させてはなりません。日本の理想都市にするべきだと思います。私の仕事は、募集定員を満たすという次元ではなく、「地方創生」のあるべき姿を追求すること。それを生徒たちに教えられました。10年以上になる小中高一貫教育では、小学生と中学生と高校生が同じ活動を行っています。当然、異なる世代間の交

流の満足度も高まるでしょう。今の若者に必要な教育のように思えてなりません。また、地域貢献にも力を入れています。毎週のように、保育園や小学校、施設に出向いて、未来を担う乳幼児や児童と遊び、一緒に学び、太鼓の練習に汗を流し、高齢者とともに、笑っている生徒たち。統廃合になれば、数多くのふれあいが一瞬にしてなくなります。まさしく、地域の火が消え、子どもたちの関係は狭くなり、地域社会の消滅はあり得るかもしれません。地域から学校がなくなることは、可能な限り、避けるべきです。伝統文化を受け継ぎ、地域貢献に汗を流す生徒のいる高校は、これからの高校の理想の姿、めざすべき姿、地方創生の主役と確信しています。

「明治は遠くを見るべかり！」

グローバル社会に対応できる人材の育成が求められています。国際都市、東京の中心、お茶の水や、移転して50年の生田に構える明治大学に集う有志たちは、「スーパーグローバル大学創成支援事業」とともに、その活躍の舞台を世界に広げていくことでしよう。その一方で、国内の地方創生が視野に入る人材づくりも大切のように思えます。スーパーグローバルな人材が、御茶ノ水、明大前、生田、中野からスクラムを組んで、遠く離れた地域の舞台にトライしてくれることを待っています。九州山地の麓の地で、明治大学のさらなる活躍を応援しています。